

江戸時代の学校？塾？「寺子屋」

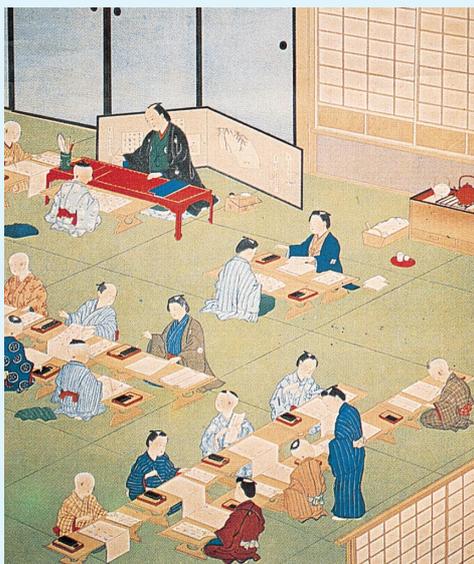
江戸時代には、「寺子屋」が教育機関として普及しました。経済の発展などに伴い、身分や性別、居住地にかかわらず、広く日常生活に文字を使ったり計算をしたりする機会が増えてきたことにより、民間の人々が、子どもたちの将来に備えて、文字の読み書きやそろばんを使っの計算能力を養っておこうという要望にこたえて、その知識や経験を生かして開いた機関でした。

これは、今でいう国や地方自治体といった行政が法律に基づいて設置したものではなく、こうした社会の変化に対応して自然と発生し、急速に普及しました。

特に、生活が比較的豊かであった大都市と比べて、家庭の負担だけでは寺小屋を支えていくことが困難であった農村などでは、住民が一体となって費用を出し合い、先生を迎え入れるところも見られるなど、今でいう「公立学校」的な性格を持ちはじめたところもありました。

子どもたちはだいたい7～8歳前後に入門するのですが、読み・書き・そろばんが中心で、指導方法は、子ども自身の自習に先生(師匠)が個別指導をしてまわるいわゆる「手習い」という方式が多かったようです。

休日は、年末年始、5節句、盆ぐらいと少なく、寺子屋によっては、5・15・25日を定休日にしたたり、七夕会、書き初めなどの様々な年中行事を用意するなどの工夫をしていたようです。



©(株)ニュートンプレス